

人間学 2 「北東アジア環境共生プロジェクト」報告

金 慶珠*

はじめに

日本・韓国・中国という北東アジア 3 カ国間に見られる近年のナショナリズムの高まりや政治的葛藤の様相にもかかわらず、相互協力の必要性は、軍事、経済、社会などの多方面にわたって益々拡大しつつある。こうした協力と交流の将来の担い手である隣国の若者どうしの人的交流の重要性が強調される中、「環境共同体」というキーワードから、その具体的な実践に取り組んできた本プロジェクトも今年で 7 年目を迎えた。その間、「社会的実践を担う人材養成」という SOHUM の基本理念に基づいて様々な取り組みを行ってきた中には、いくつかの試行錯誤もあったが、北東アジアという隣国間の交流の担い手を育成するためには、互いの社会像に対する通時的・共時的アプローチを同時に取り入れることが有効であることを体験し、確認できたものと思われる。その意味において、お互いを理解するためのキーワードである「環境」とは、自然環境のみならず、都市環境や社会環境、文化的環境などを含む多岐にわたる概念であるとともに、それぞれの現状を歴史的背景からひも解いて行かざるを得ないテーマでもあるという点に、アプローチの有用性があるといえよう。

こうした認識のもと、2015 年度の人間学 2 では、特に学生交流に重点を置きながら、韓国の社会問題および歴史と文化を理解できるように工夫された研修を行った。期間は 9 月の 7～12 日までの 5 泊 6 日にわたってであるが、事前の準備として、計 3 回の事前授業を行い、学生たち自らが環境というキーワードに沿った計画を立て、日程を組むなどの自主的参加を促した。また、引率教員も事前の調査や確認作業などを行った結果、研修現場では効率的な時間管理やスケジュールの履行が可能となった。これらの準備作業は、効率的な研修運営のみならず、学生らの積極的な参加姿勢による充実した研修成果にも極めて肯定的な影響があるものと判断され、今後においても定例化していく必要があると思われる。

受理日 2015 年 11 月 25 日

* 教養学部国際学科

日付	研修場所	内容
9.07 (月)	ソウル出発	集合時間 10:00 (出国)
	ホテル到着	Savoy Hotel 23-1 Chungmuro1-Ka
	清溪川・クァンジャン市場	「ソウルの都心環境と再開発」 徒歩にて見学・夕食 (約3時間)
9.08 (火)	国民大学国際学部 09:30~13:30	「日韓関係の現状と未来への提言」 国民大学日本学科合同授業・討論
	国民大学言論学部 14:00~16:30	「都市の歴史とデザイン」 国民大学言論学部李チャンヒョン教授の講義
9.09 (水)	昌徳宮と秘園／ 北村・仁寺洞	「韓国の伝統文化」 「韓国の都市化と伝統家屋の保存」
	貞洞劇場	「微笑」 伝統劇
9・10 (木)	戦争記念館	「朝鮮戦争と南北関係」
	梨花女子大学	大学案内とデザイン課程視察
9・11 (金)	自由研究	研究テーマを設定・調査
	新村・弘大前	「韓国の若者文化」(韓国学生たちとの交流会)
9・12 (土)		集合時間 17:00 (帰国)

1. 清溪川・ソウル中心部視察

初日(9月7日)は首都ソウルの中心部である明洞およびソウル市庁、清溪川再開発跡地などを中心とする都市整備の視察を行った。ソウルの政治・経済・文化の中心地である明洞を起点に、ソウル市庁や光化門広場、景福宮などを回りながら、その周辺に位置する在韓国米大使館や韓国外交部の建物など、約5キロにわたる徒歩の視察を行った。首都ソウルは朝鮮王朝からたどればその歴史も600年と長く、日本による植民地支配時代の建物が温存される一方で、その多くを取り壊し、新たな建物や道路の再整備(デザイン・ソウル計画)を急速に実行するなど、ソウル特有の都市計画の工夫が感じられる視察となった。

2. 国民大学における学生交流と講義

二日目(9月8日)は、本学の学生交流提携校でもある韓国の国民大学を訪れ、午前中は国際学部・日本専攻学生ら約20名(指導教員・李元徳教授)との合同シンポジウムを行った。全体を三つのグループに分け、各グループがそれぞれの社会が抱える問題点を指摘しながら、その解決のためのヒントを相手国に見出すという内容で構成された発表を行い、そのための日韓



資料1 明洞の風景



資料2 清溪川再開発後の様子



資料3 ソウル市庁付近にて

交流の在り方について意見交換を行った。各グループのテーマは、事前に配布した参考文献にしたがって予め設定されたものだが、「都市化と不動産事情」、「東京オリンピックと平昌オリンピック」、「アニメにおける表現の自由」など、日韓の社会、文化、国際交流といった多様な分野を幅広く扱えるように工夫した。シンポジウムは終始活気づいた雰囲気の中で進められ、その内容も大変興味深く、それぞれが抱える多様な社会問題には多くの共通項とともに、それぞれの社会事情に合わせた独自の工夫が取り入れられていることを実感することができた。

また、午後には国民大学言論情報学部李チャンヒョン教授を訪れ、都市化と情報発信の在り方に対する講義を受講した。李教授により約1時間半にわたって行われた講義では、都市化の意味とメッセージ、その情報としての概念化と発信の在り方という抽象的になりやすいテーマが扱われたにもかかわらず、多様な画像や動画を用いて学生たちにもわかりやすく親しみやすい内容となっていたことが印象的である。その後、李教授の研究室で行われた懇談会では、ソウルのみならず、日本やヨーロッパにおける都市化の歴史を比較しながら、それぞれの都市化における特徴をさらにわかりやすく説明をしてもらい、学生たちからも多くの質問が出るなど、大変有意義な時間を体験することができた。特に、ソウルと東京はアジアにおける急激な都市化をともに経験しており、その変化への対応における類似点が指摘された。以上のように、



資料4 国民大学国際学部との合同授業



資料5 「都市化と情報発信」の講義



資料7 李チャンヒョン教授の研究室にて

国民大学で行った都市環境や社会環境をテーマとした学生交流ならびに、共に取り組むべき課題と協力・交流の在り方に対する講義は、SOHUMの基本理念を体験できる貴重なプログラムであると意味づけられる。

何よりも、以上の日程は韓国社会に対する知識を深めるという意味ではもちろんのこと、何よりも現地の学生たちと直に話し合うという交流の場を持てたことも大変有意義であった。韓国における日本専攻の学生たちの特徴として流暢な日本能力が上げられるが、その多くが日本での語学研修などの経験を持っていることから、本学および国際学科において積極的に推進している各種研修プログラムにおいても対象者の拡大など、今後においてもその成果と意義を継続させるためのさらなる努力が必要であると感じた。

3. 韓国文化から見た異文化理解

3日目（9月9日）は、韓国の伝統文化を体験することによって、お互いの感性における異同を体験できる機会を設けた。具体的には、ソウル市内に残る朝鮮時代の故宮の中でも最も韓国的であり、かつ美しいとされる「昌徳宮」を訪れ、その宮殿の建築様式ならびに庭園構造を視察した。一見すると土壁に瓦屋根という類似した様式にも見える建築物だが、その詳細にわ



資料8 昌徳宮の建築様式



資料9 北村地区

たって見られる様式美の差は、日本と韓国が同じく東アジアの漢字文化圏に属しながらも、それぞれに独自の文化的独自性を維持、発展させてきたことを体感できる機会となった。具体的には、日本の庭園などが自然を緻密に再現しながら管理する人工美に優れているとするならば、韓国の庭園は背景の池や山などを風景井の一部としてとらえた設計になっているなど、自然との調和をより重視した様式となっている点が特徴としてあげられる。

また、午前中にはソウル市の伝統家屋保存地区である「北村（ブクチョン）」を訪れ、朝鮮時代からの邸宅のみならず、現代社会の急激な都市化の中で見失われた60-70年代の生活地区を訪れることで、その「古き良き時代」の生活様式を体験することができた。この地区は、朝鮮時代から支配階級の生活地区として宮殿の近くで栄えた地域だが、20世紀に入ってから都市整備や再開発計画などの紆余曲折を経て、今日の景観を維持保存している。特に、今でも多くの住民たちが実際に生活している空間として、その様子を間接的に体験できることは、貴重な経験であった。

さらに、同日の夕刻にはソウル市が運営する「貞洞劇場」にて韓国の伝統劇「微笑」を観覧した。韓国文化に関しては多くの学生たちが強い興味を示しているものの、日本において体験できるのは、いわゆる韓流と呼ばれるテレビドラマや K-POP などの大衆文化に限られている。



資料10 西大門刑務所跡



資料11 梨花女子大色彩デザイン研究所

そこで本研修では韓国の伝統芸術であるパンソリ（南道地方の伝統歌舞）やサムルノリ（農村地域の風楽）などを織り交ぜた現代劇でもある本公演を観覧することによって、韓国文化の多様性を体験するとともに、伝統芸能に対する理解を深める機会を持つことにした。観劇後の学生たちの感想も大変評判がよく、若い感受性をもって芸術を通じて異文化を理解することの面白さを実感した様子であった。

4. 学科別活動としての歴史とデザイン体験

4日目（9月10日）の研修内容は、国際学科とデザイン学科がより専門分野関連した知識と体験を得るための研修日として、学科別に行動を取ることにした。具体的には、国際学科の場合、「日韓の歴史認識問題」をテーマに、なぜそれぞれの歴史認識が今日までも大きな葛藤要因となっているのかを理解するための手掛かりとして、ソウルに保存されている植民地時代の政治犯収容所である「西大門刑務所跡」を訪れた。そこでは、同じ時代を共有せざるを得なかった韓国と日本の歴史認識には、それぞれの立場に基づいて大きな差が存在していることを体験することができたものと思われる。こうした歴史認識の違いを理解し、それを単にナショナリズムの対立として理解するのではなく、朝鮮半島の歴史と「韓国が見た植民地支配」の一端を直接観察することで、学生たち自らが両国の歴史に対する主体的な判断と主張を持てるようにすることが国際学科としての研修の目的でもある。

他方のデザイン課程の学生たちは、梨花女子大学の「色彩デザイン研究センター」を訪れるとともに、ソウル市でも世界的な建造物として注目されている DDP (Dongdaemun Design Palaza) を訪れた。梨花女子大学では、デザインの決定的要素である色彩に対する科学的研究



資料12 「戦争記念館」にて

の現場を当研究所の専門家からの詳細な説明を通じて体験できたのみならず、質疑応答の時間を通じて日頃の疑問に対する知識や情報を得ることができた。また、DDPでは、最先端のデザインのトレンドを体験できただけでなく、建築物と都市の調和という問題についても改めて考えさせられる機会となった。

5. 自由課題と今後の取り組み

5日目から帰国日までの時間は、学生各自が自由テーマを決め、その課題現場を実際に訪れた後、最終的にはレポート形式でまとめて提出するように求めた。これは、研修という限られた時間の中で、学生たちの自主的な興味と活動を促す目的から設定された時間であったが、最初の憂慮もむなしく、大変まじめで有意義な活動内容となったものと判断される。国際学科の場合、ソウルに位置する「戦争記念館」を国民大学の学生たちとともに訪れ、世界第二次大戦後の冷戦の始まりと朝鮮戦争という歴史を直に体験した。学生たちのレポートからも、戦争や歴史に対する真摯な姿勢が伺われ、有意義であったと評価できる。

デザインの場合、過去5年にわたって推進されたソウル市の「デザインソウル行政」について、その第一線で活躍してきた「キムヒョンソンデザイン事務所」を訪れ、直接話を聞く機会を設けた。デザインと行政という二つの異なる分野が協力することで達成できる環境およびその課題についても新たな問題意識を持つことができたものと思われる。

以上、本年度における「北東アジア環境共生プロジェクト」のソウル研修は、一貫したテーマである「大学間の学生交流を通じた日韓の社会的・歴史的・文化的共通性を見出す」ことを中心にカリキュラムを組んだ。また、そのために現地での合同授業や講義、さらには国際シンポジウムへの参加などを通じて、日韓両国が抱える共通の課題を理解しながら、積極的にコミュニケーションを図ろうとする学生たちの姿勢を見出すことができたのが本研修の最大の成果でもある。日本とは異なる国のあり方を論理で理解するという限界を超えて、その物理的制約を取り払った直接体験を通じて身に付けた知識や認識、そして感性は、急変する北東アジア社

会の未来を担う若者世代に対して、日本の大学教育が継続的に提供していくべき体験学習の貴重な場でもある。その意味で、北東アジア共同体という切り口から、学際的なアプローチに基づく体験を可能にしている本プロジェクトは今後においてもその内容を充実させながら継続的に実行されるべきであると考ええる。